
潰し魔

ハシリケンシロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

潰し魔

【Z-コード】

N1933B

【作者名】

ハシルケンシロウ

【あらすじ】

見る影もなく顔面を潰された女の死体が発見された。二人の刑事が捜査に乗り出すが、まだこの被害者の身元も割れないうちに、次なる被害者が出てしまつ。

起（前書き）

かなりグロいです（Ｔ○Ｔ）

苦手な方は、この段階でスルーしてください

ｍ（—）ｍ

俺の人格が疑われてしまうのではないかと心配なぐらい、【グロい】
です【（^_^;）

「狂ってる……」

現場に到着しての第一声はこれだつた。

『商店街の路地裏に若い女性の変死体発見』との出動要請が入り、パトカーで急行した結果見た物が、これである。

確かにそれは、女だつた。
見た目一発で『女』と断言できる体格。
間違い無いようだ。

だが、顔が判らない。

本来なら、顔があるべき場所にある物。
それはもはや、顔と呼ぶことが出来ない代物だつた。

死体の顔。

そこには、生前の面影は一切無い。

どのような容姿だったのか、どうにも想像がつかないほどに、惨めに潰されていた。

「女の子なのに……。

こんなのは酷いです！

なんも出来ない女の子をこんなになるまで素手で殴り続けるなんて！…

ボロボロだの、ボロボロだのといったレベルではなく、ぐちゃぐちやだつた。

皮膚は裂けて捲れ上がり、そこから脂肪分や、何やらドロドロした半固体状の体液と一緒にになつて、潰れて千切れた肉がはみ出している。

歯は、全てへし折れ、飛び出した眼球が、頬の上でむくたらしくひしゃげていた。

「あのお、あたしこれ、女人だと思つんですよ」

声をかけてきたのは鑑識官の羽沢夏世だ。

伝説の鑑識からいはを学び、それを遺憾無く自分の知識として吸収している。

「あのね、夏世ちゃん。

そんなこたあ見りや判るのよ。

こんな立派なおっぱいしてる男なんて、居る訳無いでしょ？」

いつ受け答えたのは先輩刑事の加藤早百合だ。
この一人、あまり仲が良くない。

先輩曰く、

「臯月の友達はみんな嫌い！」
とこつことらしい。

臯月といつのは、先輩と同期の女刑事で、総ての言動が芝居がかつて見える、なにを考えているのかわっぱり得体の知れない女だ。
正式名称を古国臯月といつ。

階級は【警部】だ。

先輩の階級がまだ【警部補】であるため、それが一人の関係に油を

注いでいる。

そのとばっかりで、夏世にも先輩の、臈月に対する嫌悪感が延焼してしまっているのだ。

「そんなの、あたしだって見て判りましたあ！」

あたしが言つてるのはあ、犯人のことなんですか！」

『伝説二世の御手並み、拝見させてもらいますか』

あたしは、傍観を決め込んだ。

「いいですか、被害者のお腹、濡れてるのは解りますねえ？」

確かに、濡れている。

着衣に広がった染みの範囲を見る限り、かなりの量の液体を浴びたものと思われる。

「わたしもそれは気になつてたのよ。

でも、それがなんだって言つの？」

「加藤さんはこれ、なんだと思ひますかあ？」

先輩はどう答えるのだろう。

あたしなりの答えはもう出でていた。

「何つて……、知秋ちやんはどう思つてへ

知秋とは、あたしの名前だ。
正式名称は荒居知秋あらい ちあきといつ。

入庁したてのまだまだ至らないヒヨウ刑事だ。

「あたしは……、まだまだ考え中です。

先輩からどうぞ」

取り敢えず先輩の顔を立てておく。

「あたしは……、犯人のおしつこか精液だと思つてたんだけど」

あたしの考へは、そのどちらでもなかつた。

「ええ、確かにセイエキではあるでしょうねえ。

でも米謫に青じやなくて、立心謫に生なんですう。

被害者のお腹、濡れてるところの臭い、かいでみてください」

いちいち間延びするのは鬱陶しいのだが、やる気になつた夏世は「

じ」とく語尾が間延びするのだから仕方がない。

一度鬱陶しいと文句を言つたら大泣きされたことがある。
どうにも出来ないので、もう間延び矯正は、諦めてしまった。

「かげつて言われても……、むつこの辺から充分におしつこ臭いし
ねえ。

あまり臭いは参考にならな」と思つんだけど」

確かに、臭かつた。

余程恐ろしかつたのだろう、被害者はこれが本当に人間の、しかも、
女がする量なのかと疑つてしまつほど、大量に失禁してしまつてい
たのだ。

そして、被害者の体内から放たれた尿は、その不快臭をなんの情け
も容赦も恥じらいもなく、辺り一帯に遺憾無く撒き散らしていた。

文句を言いながらも、先輩は臭いをかぎに行く。

「あーったく、くっさいわねー……」

そして、失禁跡を踏まないよう気を付けながら、遺体の腹部に顔を寄せた。

《ーー》

あたしは、先輩の表情が険しくなったのを見逃さなかつた。

いつたい何があつたのだろうか。

先輩は、眉間に深い皺を寄せ、狂つたように鼻をひくひくと利かせている。

そして、おもむろにあたしに振り向き、告げた。

「知秋ちゃん、これ……、臭くない」

その答えは予測できていた。

間違ひ無く、染み自体は無臭なはずだ。

「そりなんですかー!？」

芝居がかつていなかつたか心配だつたが、先輩の手前わざと驚いて見せた。

あたしに出し抜かれて機嫌を損ねたことは、一度や一度ではない。

「そりなんですよ、臭くないんです。」

あたし、中肉中背の、平均的な日本成人女性です。

ちよつと被害者をぶん殴りやすい位置に座つてみますねえ

そう言って夏世は、腕との位置関係を調整しながら、被害者に馬乗りになつた。

「ほらあ。

この位置に来るんですう」

染みは、夏世の股間を中心に据えるよつた位置関係で広がつていた。

「これつて、あれ……、女がこの女の子ぶん殴つてる最中に悦に入つて潮吹いちゃつたつてこと……？」

この問い合わせて夏世はこう答える。

「あたしはあ……、そう思いますう……」

そしてそれは、あたしが出した答えでもあつた。

初めから考えてはいたことだつたが、実際に言葉として聞いてみると、更に現実味が増し、体が震え出した。

あたしは考える。

実際にこの状況になるには、被害者と犯人の間でなにが行われたかを。

まずは、犯人が被害者をここに連れ込む。

これはお互いに女なのだから、さほど難しいことでもないだろう。

そして、次は、どうしたのだろうか。

……、一番有利得る可能性は、ここに連れ込むなり、殴り倒してしまうパターンだ。

だが、実際にこれを行うには、少しごらいは警戒している相手をそれでも殴り倒すことが出来る圧倒的な素手戦闘能力が要求される。

また、そんなことが出来るのは、空手家か、ボクサーか、プロレスラーぐらいしかいないと断定していいだろう。

どれも、女であるところを踏まえると、かなり絞り込むことが出来そうだ。

この手の快楽殺人というものは、暫く続く傾向があるといつ。なんとしても、この一件だけで終わらせたい。

「知秋ちゃん、この一件だけで……、終りにしようね！」

あたしはみんなの前で、そう誓いを立てた。

承（前書き）

ここが一番グロいです

（トロト）

ご注意ください、自分の出来るグロ描画の、ほぼ全てをつぎ込んでいます（^_^;）

苦手な方は、是非スルーの方向で。

承

潰し魔は、相手を物色している。

勿論【殺害する】相手だ。

彼女には、卓越した身体能力と、魔法の手帳がある。

この二つのアイテムさえあれば、いくらでも楽しむことができるのだ。

『どうせなら、可愛い娘や綺麗な娘にしたいよねえ。

美しい物が、ジワジワと壊れていぐ……【カタル시스】って叫ぶの?

うーん、感じちゃう』

通常では絶対に見せない【潰し魔テンション】に、徐々に入っていく。

『あたしより可愛い女や綺麗な女なんか、みんな死ねば良いの
テンションが、急ピッチで上がっていく。

『あつ！

あの娘、可愛い。

あの娘と遊ぶことにしてよー』

とつとう潰し魔は、獲物を見つけてしまった……。

「ちょっといいかな?」

潰し魔が高校生ぐらいいの女の子に声を掛けながら、悪魔の魔法を発動させる。

「あなた名前は?」

潰し魔は、魔法を発動させた後に、必ずこの質問をする。そつする」とこよつて、魔法の効き具合いが確認出来るのだ。

「えっと、あのー……、矢沢茧子です、……」

オドオドしながら少女がそつ名乗つた。

潰し魔は確信を持つ。確実に魔法が効いている。

潰し魔に魔法が効いていると判断されてしまうこと、それは、この矢沢茧子という高校生が殺害されて死ぬということを意味している。潰し魔はいろいろと適当な理由を付けて茧子を人気の無い場所へと誘導していく。

そして、殺戮が始まること。

「あの、お話ついでぶつ……」
「董子の言葉が終わらないついでに潰し魔の拳が左頬にヒットする。

「ああああああ……」

悲鳴をあげながら、47キロの体が宙に舞いつ。

女の子の柔肌を殴り付ける感触。
堪らなく気分がいい。

大きな音を発して、董子が着地する。

「あつ、あつ……」

か細く鳴きながら董子が、口から血混じりの唾とともに、数本の奥歯を吐き出した。

「あつあつ……、ああああああ……」

女性特有の間高い裏声。

潰し魔お氣に入りの、この、悲鳴とこう鳴を声に、

「茧子ちゃん可愛い！」

ねえねえ、もつと鳴いてよ。

ね？」

と、満足しつつも、まだ物足りない顔を告げる。

「奥歯、いっぽい抜けちゃったねえ。

アンバランスだから全部抜けちゃおーね」

言つなり、のたうち回る茧子に馬乗りになつた潰し魔は、彼女の大きく開かれた口内に、力一杯に、右の拳を叩き込んだ。

「たつ、助けてください助けてくださいたぶおー！」

必死に慈悲を求めている茧子の全ての歯を、右の拳一つでへし折る。

おもむろに拳を抜いた後に残つていたもの、それは、ゴボゴボと血の泡を吹き出す元の状態よりも若干広がつてしまつた、緋い色のみで構成されている茧子の口だつた。

「がつ、がつ、がぶげ……、ぐばばび」

それはもはや、人間の言葉ではなかつた。

右手に微かな痛みを感じていたが、己の加えた攻撃によつて原型を失つた茧子の口から放たれる、意味不明な声。

ほほ間違いなく美少女の部類にカテゴライズされるであろう矢沢茧子。

それを叩き壊している実感。

潰し魔は、このえも知れないカタルシスに酔いしれ始める。

「あーん、もう、茧子ちゃん可愛い。

お口がクチャクチャになっちゃったのに、なんでこんなに可愛いの
お？」

茧子に対して、素朴な疑問を投げ掛ける。

当然返事が返つてくる筈もないのだが。

「あっ、そーかあ！

おめめが可愛いんだ！

そのぱっちりクリクリで、キラキラなおめめが可愛いんだあーーー！」

無邪気な満面の笑みを湛えながら、自分なりの結論をながば強引に導き出した潰し魔は、

「えーーー！」

と、楽しそうな掛け声を発して、右の拳を茧子の左の目元に叩き込むために振りかぶる。

そして、

「それえ！」

との掛け声と共に、それは狙ったポイントに叩き込まれる。

「げぼあー！」

茧子が奇声を発するのと、彼女の眼球が、すぐ側に大きな衝撃を受けたために、外に飛び出したのはほぼ同時のことだった。

「わあ、田ん玉出ちゃつた。
キモーー。

ねえねえ、田んぼって、出歩かないと痛いの?
ねえ、出歩かっても見えるの？

あとお、げぼあつてなあに？

それらは全て、潰し魔には経験したことのない、素朴な疑問である。

悦んでこむ子どものような間高い声で、むなや答える返つてくれる」とが無ことは歴然としてこむ猫子に對して、質問責めを浴びせる。

案の定、返つてくれる声は、

「がぼつ、『じぼ、『じふつ、『げふげふつ……』

とこづ、喉に流れ込む口から出直しむせ返の音のみだった。

「一個だけ出でるのは不公平だから、一個とも出歩かねーね」

ケラケラと笑いながら、潰し魔は攻撃を加えるために態勢を整える。

「えいっー！」

右の眼球も飛び出してしまう。

「がががぼあがつ！

げふげふつ！

『じまあー！』

激しく痙攣しながらむせ返る猫子の震えと「じま」めきに刺激された潰し魔の股間が、遂に、濡れてしまつた。

それと同時に猫子の股間も濡れ始めていく。

一人の下半身を濡らす体液。

それは、全く違う種類の汁だったが、一人の下半身の見た目の状態は全く同じになってしまった。

そして、二人の汁は、茧子の腰の辺りで一緒にたに混じり合つてしまつ。

「やだ汚い！」

あたしの汁があ、茧子ちゃんのおしつこと一緒にたになっちゃつた。

臭い！

汚い！

キモい！

ムカつくぅーーー

ひとしきり茧子の失禁を罵つた後、彼女の顔を打ち据えるための態勢を作り、止めを刺す旨を告げる。

「こんなところに、こんなに臭いおしつこ垂れる女の子は、傍迷惑だし悪臭公害だから死ね」

と……。

後はもう、茧子が跡形もなく潰れてしまつまで両手で顔を殴り続けるだけだった。

2006年、12月20日。

この日、矢沢菫子という一人の少女が、生命体から、物体へと変わった。

続く

転（早百合の抱いた疑惑と決意）

また新たな犠牲者が出てしまった。矢沢菫子（17）。やはり、見る影もなく顔がひしゃげ、生前の面影を生命諸共一切がつさい奪われてしまっている。

着衣の腹部には茶色みがかつた染みが広がり、遺体の腹部には広範囲に渡つて青黒い鬱血が、あたし達をあざ笑つかのようこれでもかと血口狂張している。

尻周りに非常識な程の広さを誇る黄色い染みが広がつていてもまた、前の被害者と同じだ。身に付けていた下着が、鮮やかなツートンカラーに染めらあげられている。かつて、古代人が黄色染料として用いていたと言われている尿という体液を大量に吸い取つているのである。

それはそれは鮮やかに……、黄ばんでいた。

「マスクには顔を殴られて死んだとしか言つてない……。なのにこんなに状況が似てるなんて……」

それは、紛れもなく同一犯による犯行であることを物語つている。……みんなの前で誓いを立てたにも関わらず、また犠牲者を出してしまつたことに、負の思考という無間地獄から沸き上がる、悲しみ、怒り、脱力感、無力感といったマイナスの感情があたしという存在の全てを埋め尽していく。

知秋がやはり、怒りと憂いの入り混じつた田付きで、肉塊と化したそれを見つめている。今回の事件の、前回の事件との最大の違いは、事件発覚後すぐに被害者の身元が割れたことである。前回奪

われていた被害者の手荷物が、今回は残されていたのだ。それは宛ら、日本警察への挑戦状であるかのようだ。そう、『捕まえられるものなら捕まえてみる』とでも云わんばかりの……。

あたしはこの被害者、矢沢蛍子を知っている。昨年の全日本空手選手権で手痛い敗戦を喫し、あたしの3連霸を阻んだ相手だ。それまではもはや、朝青龍状態だった。せいぜい千秋に負ける程度のものだったのだ。そこに現れた新星。その大会は、結局知秋にのされて準優勝に終わっているが、間違い無く蛍子は、オリンピック級の空手家だった。

ディープインパクト。それは、見るもの全てにとてつもない衝撃を与えるものになつてほしいとの願いを込めて名付けられた、青鹿毛牡馬。その、ナリタブライアン以来の3冠馬が、あたしの脳裏を地響きと共に駆け抜けた。この前は聞き捨ててしまつたが、手掛けは、目の前に転がつていたのだ。

まさに、『ダイープインパクト』だった。ダイナマイトが爆発しても
これほどの衝撃にはならないだろう。

あたしの考えた通りなら、間違い無くこの矢沢萤子は死なずにす
んだ筈だ。ほんとに申し訳なく思つ。

まだ物証はなかった。だが、犯人がほぼ確定している以上、無い
ならば、引っ張り出せば良いのである。

あたしは、萤子を見たとき以上の負のエナジーに存在の全てを蝕
まれながらも、犯人【潰し魔】を追い詰めるための算段を整える。

続く

転（知秋が巡らせる思考と策略）

あたしは考える。

なぜ早百合先輩が右手に包帯を巻いているのかを……。

あたしは考える。

なぜ茧子さんが、なす術無く殺されてしまつてこるのかを……。

それは、茧子さんの高い戦闘力を無効化する悪魔の魔法を戦闘開始前に発動したからだ。

問答無用で相手を萎縮させる」ことができるもの……、警察手帳。

刑事の早百合先輩も、勿論持つてこる。

なにか、なにか先輩を潰し魔であると断定できる証拠はないだらつか、なにか……。

……、……、無い。

今、あたしも右手に包帯を巻いている。

先輩はあたしを疑っているのだろうか。

今あたしが先輩が潰し魔である証拠を探していくよ!ひー。

なんとしても、証拠を見付け出さなくてはならない。

また潰し魔が出て来る前に。

先輩はなにやら深く考え込んでいる。

恐らくは、どうやってあたしを潰し魔に仕立て上げるかだろ？
あたしだって先輩を潰し魔にしようとしているのだ。

それは、仕方のないことなのかもしれない。

先輩は突然、蛍子さんの遺体の上から何かを手袋をしている左手で拾いあげ、あたしに向かって今まで見せたことのない般若のような笑顔で歩み寄つて来る。

その様子は、宛ら追い詰めた獲物をいたぶるために近付いてくる殺人鬼のようだ。

刑事は、犯罪者を社会的に抹殺する狩人とも言える。

あながち殺人鬼と言う表現も間違いではない気がする。

「知秋ちゃん……。

これ、蛍子ちゃんのお腹の上にあつたんだけど、なんだと思う？」

縮れた毛。

潰し魔の愛液によつて大きな染みが広がつてお腹の上にあつた

縮れ毛。

その問い合わせに対する答えはもはや、一つしか無い。

「潰し魔の……、隠毛？」

位置からしても、形狀から見ても、それしか無いようだ。

先輩は続ける。

「これで漬し魔も捕まるわね。

うちには、漬し魔の汁付きの被害者達の衣服もあるんだし、この毛と汁のDNAの型が一致すれば、決定打になる。
早速鑑識に回して来るわね」

先輩は、なんのつもりでいちいちそんなことをあたしに報告しに来たのだろうか。

まさか、本人特定の基本を知らない訳でもあるまいし。

ハツタリをかまして、被疑者の反応を窺うつもりだったのだろうか。
その必要は無いと信じつつ、DNA鑑定の基本を先輩に説明する。
「もし一致しても、それは漬し魔のDNAサンプルが一つ増えるだけで、特定には到りませんよ？」

直に被疑者から抜いた訳じゃないんですから」と。

「あつ……」

見付けた。

見付けてしまった。

先輩を漬し魔にできる根拠を。

まだそこには無いが、羽沢先輩の力を借りれば引っ張り出すことが出来る。

あたしは早速、先輩へと電話をかけた。

続くく

転（陰謀の健康診断）

あたしは今千秋と共に、とある総合病院の中にいる。

白い壁、白い天井、白い蛍光灯、白い服の職員。
なにからなにまで、白で埋め尽された空間は、清潔感よりもつくり
寒さの方をより強く強調していく。

昨日の夜、夏世に電話でお願いした。

「明日の健康診断で提出される、知秋ちゃんの検尿と検便と血液サ
ンプルかすめ盗つて来て、マル害の着衣のお腹の染みとDNA比べ
てほしいんだけど」

と。

疑いを持ち始めた取つ掛かりは、一番田の被害者が矢沢蛍子だった
ことだった。

彼女は、オリンピック級の空手家だ。

その彼女がなす術無く叩き潰されている。

それは、最初の一撃を無警戒かつ無抵抗の状態で加えられたことを
意味している。

どういう立場の人間なら、その状況に持ち込むことが出来るのか。
可能性は、絶対的に信用でき、しかも、抵抗することが許されない
相手だった場合のみであると言つていい。

例え顔見知りだったとしても、夜に、人気の無い場所に連れ込まれ
たりしたら警戒しない筈がない。

それが可能な者。

それは、国内で唯一、仕事を妨害されると【現行犯で逮捕すること】が出来る【権限を持つ警察官ではないのだろうか。

余程根性の座つた者でなければ警察手帳を提示されただけで萎縮してしまうだろう。

もし、仮に、【話を聞きたいだけ】と誘い出され、自分に何もやましここが無かつた場合、要求を断る必要はあるだろうか。

無い。

そんな必要は、全く無いのだ。

童子が潰し魔、あるいは潰し魔グループである可能性は、その殺され方で即座に否定することができる。

やはり、可能性としては、相手が警察官だったといつことしか残らない。

警察官は、身を守る術としてなにか格闘技を身に付けることが暗黙のルールとして存在している。

したがつて、今までの推論だけで知秋を潰し魔であると断定することは、当然ながら出来ない。

だが。

彼女は、口を滑らせてしまった。

確かに、知秋は最初の事件の現場に入ったそばから……、……、こう言つていたのだ。

「狂つてゐる……。

【女の子】なのに……。

こんなのが酷すぎます！

何も出来ない【女の子】をこんなにになるまで【素手で】殴り続けるなんて！！」

と。

最初のマル害は未だに身元すら判明していない。

しかも、その遺体はあたしが夏世に、

「こんな立派なおっぱい」

という言葉を使ってその主が女性であることを説明した程、女性としての体格が完成させていた。

にも拘らず、【女の子】である。

確實に大人の女性の体格で顔が判別できない遺体に対して、女の子という表現を使った理由は、その被害者が女の子（未成年）だったということを初めから知つていたからではないだろうか。

更に言い訳のしようもないのは、【素手で】殴り続けたといつ言葉だ。

あの段階では、鑑識官からも、検死官からも、機捜隊からも、素手で殴り殺されたとの情報はもたらされてはいなかつたのである。それはそうだろう。

あの言葉は、現場到着後についの一番で遺体を確認に行つた知秋が、

開口一番に発した言葉なのだから。

無論、その間に知秋に接触した、捜査官や検死官が誰一人居ないことは、ずっと側に張り付いていたあたしが証明できる。

知秋が潰し魔だ……。

残念ながらこれはもう、動かし難い事実であると言つていいレベルに到達している。

後は、物証だけ。

夏世には、DNAが一致したら、宇治課長に逮捕状の請求手続きを執つてもうつように指示してある。

全ては、この健診が終わってからだ……。

もはや、潰し魔は、先輩しか存在しない。
今から思えば、先輩は、否定しなかった。

あたしが何の氣無しに言つた、【女の子】や、【素手】に対して、
いつも当たり前のよつにそれを前提に話を進めている。

知つていたからではないだろうか。

怪しい点はまだある。

茧子さんの時の、包帯だ。

茧子さんの口の千切れ方は、間違い無く右の拳を叩き込まれたものだ。

傷口の範囲が右側の方が広く、短冊型に縦に、潰れたり残つたりしていた。

指が当たつた部分の肉が潰れ、指の間の部分が助かつたと考えるのが自然だろう。

そして、その拳を口の内部まで押し込むことによって、生えている歯を全てへし折つた、そう考えて間違い無い。

だとすれば、絶対に右手の甲と指に茧子さんの歯が食い込んでいる筈なのだ。

確実に、包帯クラスの怪我になる。

確かに、あの日はあたしも、右手の指と甲がえぐれていた。肉が丸見えになつていて、血の代わりに黄色い汁が止めど無く出来るほど、えぐれていた。

だが、それは、あたしの寝相が悪くて手をそこら中に打ち付けていたからに過ぎない。

その証拠に、部屋が血まみれになつてしまっていた。とにかく、寝て、起きたらそうなつていたのだ。寝ていてるあたしに、茧子さんを殺せる訳が無い。

今日は、健康診断だ。

当然、検尿、検便、血液検査がある。

これらを行うためには、サンプルが必要になる。

羽沢先輩に、これらのサンプルを警察で回収して別な検査に回して

もちろん、電話で依頼しておいた。

身内から潰し魔が出てしまうのは残念だが、これ以上の犠牲者を出さないためにも、この騙し打ちは、必要悪なのである。

健診終了と同時に、潰し魔事件も終わる。

続く

転（間に挟まれた夏世が張った眼）

二人から全く同じ依頼を受け、今、それを皐月さんに丸投げしたところだ。

本来警察手帳を提示して捜査を行うことは、鑑識官の仕事ではない。依頼の内容は、【健康診断に使われる三つのサンプルの回収】。ここに、検尿、検便には、直筆サイン入りのラベルが貼つてある。これらと、警察側で押収した三つの潰し魔サンプルのDNAの型が一致すれば、言い逃れ出来ない物証となるだろう。

時間的に、もう健康診断が始まっている頃だ。

病院長に、電話で血液サンプルを一番始めに採取してくれるよう、スケジュールを調整してもらつてある。

事務所のデスクに足を投げ出し、椅子を後ろに傾けながら、くわえた煙草に火を灯す。

「皐月さん、余計なこと言わなきゃいいけど……」

皐月さんのお喋り癖を思いだし、苦笑いが自然と浮かんでくる。彼女が事件関係者とよた話を繰り広げまくつたために遅々として捜査が進まないという苦情が、何度もあたしに寄せられたことがあった。

「そんなこと、あたしに言つてもしあうがないのに……」

今回それをあたしが皐月さんに注意しなければならなくなるようなことは、御遠慮願いたいところだが……。

不安を覚え、煙草をくわえたまま携帯電話を手に取った。

送信先は、皐月さんだ。

アドレスのあ行を開き、【岩国臥月】を呼び出す。

送信ボタンを押すと、直ぐに待ちウタが聞こえてきた。

臥月さんの携帯電話が奏でるノイズの酷い軽快でありながら耳障りなヒップホップをBGMに、あたしなりに一人が言っていたことを整理してみるとこにした。

まず、二人の言つよつごひらかが潰し魔であると断定して良いのだろうか。

ここまで考えたとき、煙草の灰が、服の上に落ちてしまった。考え事をすると、前後不覚になる癖があるとよく注意を受けるが、どうも治ってくれる気配は無いらしい。

煙草を灰皿で揉み消して、続きを考えようとしたところ、BGMがヒップホップから、

『留守番電話サービスセンターへお繋ぎします』

との画声に変わる。

お節介ながら、一言注意しておくことにした。

「臥月さん、病院内では、電源切んなきや駄目なんですよ
この言葉が、臥月の留守番センターに登録された。

そんなことより、潰し魔である。

断定は……、おそらく出来るだろう。

あたしは、間違い無くあの時凶器は拳だとの見解は述べてはいない。
明らかに【秘密の暴露】なのだ。

これを口にした荒居さんも、これを聞いて、あたしに確認してこなかつた加藤先輩も、どちらも充分に疑わしい。

問題は、どちらが潰し魔なのかどこかとなのである。もはや、捜査はこのレベルにまで達していた。

自分の仲間を凶悪犯として検挙しなければならない……、この暗黒地域の中を宛てもなくさ迷い続けるのは相当に辛いがここから抜け出すためにも全力を上げて犯人を挙げなければならない。

相手は、海千山千の叩き上げ警部補と入庁一発で捜査一課に配属された切れ者だ。

直球勝負では、いいように打ち返されるだろう。この一人と対等に渡り合つには抜群のキレを誇る変化球、つまり、罠が必要なのである。

そのためにあたしが用意した罠、それが、スケジュール変更であり、皐月さんの投入なのだ。

皐月さんが、興奮気味に帰ってきた。

担当外の事件であるにも関わらず【犯人は、警察手帳を隨時携帯している警察官だ】【うちちらの管轄内に事件が集中しているから、警察庁内の可能性が高い】などの考えを巡らせていただけに、どうこも知的好奇心が押さえきれない様子だ。鑑識課に入つてくるなり、

「夏世ちゃん、どうちかな……」
など、様々なことを呟きながら、事務所内を所狭しと右往左往している。

「皐月さん……、ちょっと落ち着いてください。

ううとうじこです……」

思わず口に出してしまった。

「科捜研から結果が来れば判るんですから、ジタバタしてもしようがないですよ。」

そう、否が応にも科学捜査研究所が【どちらかが潰し魔である】といつDNA型鑑定の結果を持つてきてしまうのだ。
例えそれが、誰にも望まれていない結果であろうとも……。

初期の段階で荒居さんと加藤先輩が怪しいと睨んだわたしは、茧子さん殺害事件の際に出てきた証拠のことを、一つ隠していたのである。

これが、あたしの決め球だ。

これから採取されるDNAの型が一致すれば、どのよつな知能犯でももう、黙るしか手はない。

状況的に、他人が偽装することは絶対に出来ないのだ。

ただ、解らないことがある。

二人揃つて同じことを頼んできたこの状況だ。
何か、偽装工作でも施しているのだろうか。

思考の隙間に、

「もしかすると早百合か知秋ちゃん、分裂症かもしれないわね……。
だとすれば、多分潰し魔は知秋ちゃんだと思うけど」

とこう言葉が滑り込んできた。

「分裂症って……、何ですかあ？」

あまり聞き馴染みの無い固有名詞に、思わず情けない質問が口を突く。

「精神分裂症。

俗に言う多重人格だよ。

人格がスイッチしてる間、前まで出てた人格は総てが途絶えてしまう。

つまり、【寝てると同じ状態】に陥っちゃうの

「……、寝てる……」

確かに依頼を受けたとき、荒居さんは寝て起きたら、右手の肉がえぐれていたと言っていた。

鼎円さんの言つ通り、荒居さんが極しく思えてきた。
だが、まだ物証が出ていないのでは、動きの取りよつもない。
全ては鑑定結果が出てからだ。

結（DNA型鑑定）

わたしは夏世ちゃんから命を受け、今、とある総合病院に居る。目の前には、巷を恐怖のどん底に叩き落としてくれた【潰し魔事件】の被疑者が一人。

そしてわたしのジャケットの内ポケットには、その片方の名がはっきりと明記されている【逮捕状】。

今の段階で、犯人は確定していた。

「ちょっと早百合、なんでそんな嫌そうな目で見るの、酷いなあ……。

……、えーっとね……、夏世ちゃんに頼まれて、捜査に介入しちゃいました。

「ごめんね」

傍目から見ていろいろと事件を邪推してきたが、実際にこうして捜査に介入し、さらに、邪推した通りの結果になつてしまつと、なぜこうも上手く話題を切り出せないのだろう。

『こんなこと、いったい早百合にどう説明しろってのよ……』

それは、歴然とした事実……。

そして、動かし難い……、眞実……。

逮捕状に書かれてある名前は、荒居知秋。

わたしは、これを早百合が居る前で告げ、尚且つ手錠までかけなければならないのだ。

「おー一人から頼まれてた、照合の結果が出ました。
じゃあね……知秋ちゃん、これ読み上げて」

知秋ちゃんが逮捕状を受取りにきた手に、手錠をかける作戦だ。
こんな騙し打ちはしたくなかったが、変に抵抗されるよりもしある。

「えつ?
……、あ、はい……」

わたしの指示の意図を掴みかねているのだろうか、なにか、あからさまにうろたえているようだ。

それでいい。

そう簡単に見破られでは困る。

知秋ちゃんが手を伸ばしてくる。
そして……、

ガシャン!!

彼女の手首に、手錠が填つた。

これが、【潰し魔】荒居知秋】という等式が、公の場で成立してしまった瞬間となつた。

「あたしが……、潰し魔なんですか……？」

信じ難いといった表情で知秋ちゃんが問うてきた。
だが、その顔を真に受けるわけにはいかない。

「早百合、時間」

「18：38」

「18：38、荒居知秋さん、貴方を【商店街路地裏で発見された女性】及び、【矢沢童子さん】殺害容疑で逮捕します」

罪状をひとしきり述べたあと、ただただうろたえるだけの知秋ちゃんに向かい、

「大丈夫。

絶対あなたを助けてあげるから。
助けてあげられるから」

と精一杯のフォローを入れる。

勿論言葉のあやとかではなく、うまくすれば、責任能力が無いと判断させることも出来るのだ。

「「めん、話は署で聞くから」

今のところ出来ることは、連行することしかない。

「知りません！」

あたしじゃないんです！」

喚きながら必死に抵抗する知秋ちゃんをパトカーまで引きずり込み、わたし達三人は、所轄署取り調べ室へと向かつた。

「なんであたしなんですか……。
訳を聞かせてください……。」

取り調べ室まで連行された知秋ちゃんは、納得がいかない様子をありありと表情に出しながら、まず、そう問うて来た。

「一致したの」

この一言しか返せなかつた。

目の前には、被疑者としてではなく容疑者として、自分の後輩が座つてゐる。

知秋ちゃんも、刑事として申し分のない洞察力を持っている。
おそらくはこれだけでも、事態を把握することは出来るだろう。
「早百合先輩もあたしと同じこと……、羽沢先輩に頼んでたんですね
か……。」

それで、先輩のじやなくあたしのと……、一致しちやつたんですね
……。」

悲し気につつ向きながら、ぽつりぽつりと言葉を繋いでいく。

「健診のサンプルは……、間違い無くあたしのなんですか……？」
サンプルがどこかで擦り変わつたことを疑つてゐるのだろうか。
うつ向いたまま、か細い声で抵抗を続けてくる。

「排泄物には、容器に直筆サイン入のラベルが貼つてある。
勿論筆跡鑑定もかけたわよ。」

血液は今日医者が直に抜き取つて、わたしが来るまで厳重に保管してもらつてた。

「……、悪いけど100%あなたのだよ」
知秋ちゃんを助けるためにはまづしなければならないこと、それは、

彼女に現実を見据えてもらう」と。

ここで、自分が潰し魔としてここに存在している根拠だけは、受け入れてもらわなければならないのだ。

「どうせだから、決定打を出してあげようか？」

「これで知秋ちゃんは……、少なくとも健診のサンプルは自分の物だと認めざるを得なくなる」

そう、いくらでも決定打を出せるのだ。

そのぐらい、捜査は終盤にむしかかっている。

「髪の毛一本貰つていい？」

語尾を上げて質問形は採つたが、有無を言わせず一本抜き取る。

まずは、健診サンプルの本人証明。

「じんわりと潰し魔＝荒居知秋が、法的に立証されていく。

「これと、健診サンプルでDNA比べてもうつから。

これで一致したら文句は無いよね？」

「はい」

素直に認めてくれた。

これについては、どうやら決着しそうだ。

「あの、潰し魔のサンプルの方は間違い無く潰し魔のなんですか……？」

余程認めたくないのだろう。

まだ抵抗は続く。

「被害者達のどちらとも型が一致しなかつたし、間違い無いんじゃない？」

死んでも、遺伝子は消滅しないから

被害者の遺体から採取した毛髪とDNAの型を比較し、サンプルとは別人であるとの鑑定結果が既に出ていた。

「でも、誰かがあたしのをなすり付けたりとか置いたりとか出来るかも……」

今度は、何者かによつて意図的に自分のサンプルを付着させられた可能性を挙げてきた。
本当にしぶとい。

だが、これも打ち砕くことが出来る。

「確かに潮とかアソコの毛ぐらには、なんとかなるかもしねないわ
ね」

ここまで言つたところで、二二三どばかりに知秋ちゃんが仕掛けて
きた。

「だつたら！

あたしじゃないかも知れないじゃないですか！！」

彼女等にもたらされたサンプリング情報は、二二三までなのだからそ
うくるのも無理はない。

だが、わたしには夏世ちゃんが仕掛けた罠、もう一つのサンプリン
グ情報があるのだ。

「あのね、あなた達を初期の頃から疑つてた夏世ちゃんが、もう一
つサンプルあがつてたこと……、隠してたのよ。

それはね……」

正直、言いたくない。

自分の後輩が、仲間が、獵奇殺人犯として刑事に追い詰められてい
く、そんな地獄画図を己自身の手で描きたくなどないのだ。
だが、彼女を不問にふすためには、どうしても一度追い詰めなけれ
ばならない。

「矢沢茧子さんの前歯に絡み付いてた【肉片】

言つてしまつた……。

もう後戻りは出来ない。

とことんまで追い詰めてしまつことじよつ。
わたしは、心を鬼にすることを誓つた。

「それって……、蓮子さんの口がほっぺの肉なんじゃないんですか？」

知秋ちゃんが切り返していく。

あれほど口がひしゃげていたのだから、当然の疑問だらつ。

「そう。

当然それもくつ付いてた。

でもね、蓮子さんはDNAの型が一致しない肉も一緒にくつ付いてたのよ」

それを聞いた知秋ちゃんは、目を丸く見開いて、黙り込んでしまった。

もはや、状況も物証も知秋ちゃんが潰し魔であることを示している。あとは、決定打となるDNA型鑑定の結果を待つばかりである。これが来れば、残る作業は彼女の前に証拠のデータを並べ、自分が潰し魔だったとの根拠を認めてもらつだけだつた。

取り調べ室のドアがノックされ、わたしの夫である吉国洋樹刑事が中へと入ってきた。

そして、

「健診サンプルと、容疑者から採取した毛髪のDNAの型、ぴったり一致です……」

とのデータをもたらすと共に、その鑑定報告書を手渡してくれた。

「知秋ちゃん……」

話掛けながら、証拠となる鑑定報告書を並べていく。

「これがね」

七枚の報告書が机の上に並んだ。

「……、……、」この件に関する全てのサンプルの「データ」

そこに記されている全てのDNAの型は、確かに一致していた。

「いやああああああああ！」

知秋ちゃんは、頭を抱え込んで激しく振りながら、悲鳴をあげている。

結（計画準備）

知秋はいつまでも、知らぬ存ぜぬで通していた。己が潰し魔であるということは、認めているというのにである。

「早百合、精神分裂症って知ってる？」

らちが開かない中、皐月が突然訊いてきた。名前や症状は知っていたが、正直メカニズムまではよく解っていないし、実際に患者を見たこともない。そしてなにより、この質問の意味が全く解らなかつた。

「で？」

もはやあたしには、先を促すことしか出来ない。

「ふう、知秋ちゃん、あんたがそんなんだから分裂しちゃつたんじやないの！？」

『』

あたしのせいで知秋が分裂した？

そんな筈はない。あたしは知秋に對して手下扱いしたことはないし、部下扱いもあまり無い。いつも妹のように接してきたつもりだ。たあしが原因で分裂するなど、有り得る筈が無いのだ。

「原因是極度のストレス。今のところ、それしか前例は無いの。どうにもならないレベルのストレスをかわすために別人格を引っ張り出して主人格は引っ込んじやう訳

……、ストレス……。本当にそうなのだろうか。少なくともあたしの前では人が変わったようには見えなかつたのだが。

「主人格と別人格の区別がつかないことって、あるの？」

あたしには区別がつかなかつた。あたしと接している間の知秋は

いつもと変わらない、よく知っている荒居知秋だったのだ。思い当たる節は、全く無い。

「普通とは逆のパターンかもしれないわね。主人格が受けたストレスを別人格が発散してたのかもしない」

あたし達は、忘れてしまっていた。ここが取り調べ室というほの暗い非日常の空間における、仲間にに対する取り調べであるという、有つてはならない状況だからなのだろうか、知秋の存在をすっかり忘れてしまっていたのだ。

「あたしは病気なんかじやない、あたしは狂つてなんてない、あたしは潰し魔なんかじやないいい！」

知秋は黙つて聞き続けてはくれなかつた。耳を塞いで大きく頭を振りながら、必死に抵抗している。

「うーん、らちが開かないわね」

そんなことは言わなくて解つてていることなのだが、ついつい口から出でしまう。全くどうすればいいというのだろう。このまま押し問答のみで留置期限を使い切る訳にもいかない。

「ポリグラフ、かけてみよっか……」

皐月が秘密兵器の投入を提案する。だが、一つ問題があつた。容疑者をポリグラフ（嘘発見器）にかけるには、容疑者自身からも承諾を得なければならないのだ。

今の中秋が受け入れるとはとても思えない。

「あたしは狂つてない……、あたしは狂つてない……」

案の定、耳を塞ぎながら虚な目で一点を見つめ、塵のようにな繰り返している。

どうか落ち着いて考えてほしい。そしてポリグラフを受けてほしい。そう願いながら、切り出す。

「知秋ちゃん、受けてみる気、無い？」

それは、知秋にとつてはある意味で究極の屈辱となるだろう。ポリグラフを受けるということは、自分が狂人であることを認めてしまうことにならざるを得ないのだ。いい返事が来ることは、頭から期待してい

ない。

「嫌です、そんなもの絶対に受けません！」
やはりというか、案の定といつか、ムキになつて拒否してきた。
おそらくは物凄い……。

《一》

そうか、そういうつもりだつたのか。ここには監視カメラがある。
そこに、豹変した知秋が映つていたならば、究極の物証になつてくれるのだ。

つまりポリグラフはただの餌でしかなく、この提案の真の目的は
ストレスを与えることによつて潰し魔をカメラの前に引っ張り出す
ことではないのかと気付いたのだ。

田をかけている部下を騙すために地球上で一番嫌いな女に荷担す
るのは癪だが、ここは知秋のためにも、皐月の策に乗つた方が良さ
そうだ。

「じめんね知秋ちゃん、あたしにも分裂してるようにしか思えない
よ」

そう発言すること、それは、あたし自身にとつても自分が分裂の
元凶だと認めたことになつてしまつたが、この際は已むを得ない。
「違います、違います！」

誰かがみんなを騙すために、物証をでつち上げたんですね！」

しまいには一時認めていた物証の信憑性に、再び難癖を付始める
有り様だ。ここまでくると本気で記憶に無いとしか思えないのだが、
それを証明するにはポリグラフを受けてもらつしかないのが現状な
のである。

「そこまで嫌がるならしゃあないか。今日のところは引き下がるけ
ど、明日また来るからね。もう受けるしか手が無いんだから、一晩
頭冷やしてよーく考えて」

そう言ひ置いて田配せしてきた皐月に促され、取り調べ室をあと

にする。

取り調べ室とは違い、蛍光灯の光を燐々と浴びている所轄署の廊下はとても眩しく思えた。あたし達と別れて留置場に戻る知秋は、いつたいどんな気持でこの眩しい廊下を歩いているのだろうか。捜査は、皐月が正式にチームに加わりあたしとコンビで取り調べに臨むことになっている。とは言つても、物証は揃つていてしその信憑性を知秋自身が既に認めているのだから、残る作業は知秋が精神分裂症であることを証明するのみなのだが。

「で、次はどうすんの？」

作戦はもう読めていたのだが、首謀者が皐月である以上は彼女のペースに足並みを揃えなければならない。一々指示を仰ぐのも癪に障るが、作戦の指示を待つ。

「うーん、どっちの方が……、美人かなあ……」

突然の意味不明な言葉にめが極限まで開いてしまったのが、自分でも判つた。おそらくは瞳孔も開いていることだろう。

「なにが、言いたい訳？」

訊き返すしか術は無かつた。こんなときにどちらが美しいかなどというテーマで戦つても意味がない。

「ん？」

女のシリアルキラーが女を襲うときつてのはね、九割六分が美人潰しなんだよ」

……、そうだったのか……。正直それは、知らない情報だった。

美人。そう一言で言つても受け取り方は様々ある。知秋の顔立ちは、紛れも無く美人だ。あたしが隣に居ても、ただの引き立て役程度にしかなれないレベルで、際立つて美しい。だが、あたしだってバスではないのだ。

美人のボーダーラインがどこを基準に引かれているかによつて、自分に出る幕があるかどうかが決つてくる。

とは言つても、化け物であるかのように年齢を感じさせない皐月と比べると、やはり足元に平伏すしか無いのだが。

AB型の質問のしかたは一通りある。状況をそれなりに説明してから質問するタイプと、いきなり質問だけガツンと言つてくるタイプだ。ことに頭脳労働者は自分が常に一、二歩先を読んだ思考を巡らせているがために他の人もそうなのだろうと説明を端折りがちになるらしい。皐月の場合は、典型的なそれである。

だから、いちいち訊き返さなければならないのだ。

「あのさ、いつつも先に説明してから訊けつて言つてんでしょう！」

美人つて、誰と比べて誰がなのさ！？

たぶん、【知秋に対しても皐月が】なのだろうが。

「あ、ごめん。知秋ちゃんに対してわたしが」

やはりそうか。頭からあたしの出る幕は無いというわけだ。

「どつちもどつちなんじやないの？」

大した差があるようには見えないけどね

かなりの高レベルではあるが、差という概念においては、本当に全くと言つていいほど、無い。云わばクレオパトラと小野小町を比べて優劣を付ける様なものである。おいそれと返事を返すことなど出来なかつた。

「まあなんであれ、あたしと比べりやあんたの方が綺麗なんだから、囮になるならあんたしか居ないよ」

これが結論だつた。

「じゃあ、わたし引き返すから。早苗合戦モードー観ててくれるかな。あ、録画もしといてね」

作戦会議終了。

残るは、首尾を待つだけとなつた。

結（計画発動）

知秋ちゃんは、おそらくわたしの顔を見るなり潰し魔に豹変するだろう。あれだけあからさまなストレスを『えたのである。変わつてもらわなければ、意味がない。

そんなことは無いとは思つが、潰し魔が出てこなかつたときのことも考慮に入れて、保険をかけておくことにした。もしもの時に頼りになるのは、やはり保険の力なのである。

保険をかけるには、手続きが必要だ。その鍵を握る人物に携帯電話で連絡をとる。

「あつ、宇治くん？」

皐月だけどさあ……、申し訳ありません、宇治警視。荒居容疑者の取り調べにポリグラフを使用したいので、許可を頂きたいのですが」

それにしてもいちいち小煩い男だ。同期なのだから、呼び方などどうだつていいだろう。運悪く身内から犯罪者が出てしまつたために、降格させられた上に昇進のペースが少し遅くなつただけで、本来ならばわたしとウジ虫野郎の立場は逆だつたのである。

ポリグラフの使用許可も無事におりて、科学捜査研究所のスタッフと取り調べ室で合流することとなる。

取り調べ室前で待機すること20分、漸くポリグラフと科学捜査研究所のスタッフである、小富山竜也がやつてきた。

「お待たせしました。使い方はお解りですか？」

知つている。心電図のような電極と、脳波計の二方向からアプローチをかけ、脈動と脳波の乱れを感知するというものだつた筈だ。だとすれば、それらと同じ位置に電極をセットすればよい筈である。それならば、問題無く解る。

それ以前に使うつもりが毛頭無い。ただ、その存在をほのめかすだけでよい。そうすることで知秋ちゃんの鬱積したストレスが爆発

することを期待してのポリグラフなのである。

「では僕は隣に待機しますね」

マジックミラーで隔離された隣室に小富山がポリグラフ本体と共に隣室に移動していく。

続いてわたしが知秋ちゃんの待つ取り調べ室へと入つていく。天井には、違法取り調べや容疑者の逆ギレ対策のための監視カメラ。モニターの向こうでは、有事のために、早百合が待機している筈だ。対策は万全。後は、潰し魔をカメラの前に引っ張り出すだけだつた。

「こんばんはー」

取り調べ室に入るなり、努めて陽気に声をかける。

「今度こそは、ポリグラフ受けてもらつからね」

若くして電撃的な恋愛結婚に踏み切り、とつと芸能界を引退してしまつた大女優であるとされている母親の血は、いつたいどの程度発揮されたのだろう。もし狙い通りなら、今のわたしの顔付きはとんでもなく不快感を与える顔付きになつていて筈だ。顔によるダメージを与えた後は、いよいよ真打ちポリグラフの登場である。隣室の小窓から小富山によつて電極と、脳波計が手渡される。

潰し魔出現へのカウントダウンは、既に【1】を数えていた。

残るカウントは、それらのセット。知秋ちゃんは、机を挟んだ向こう側で無言のまま打ち震えている。まるでこれから死を向かえようとしている者の断末魔のように、激しく、小刻に震えている。そして、その瞳は、もはやわたしが知る【荒居知秋】のものとは、全く異質のものとなつっていた。

《来るー》

そう直感した。間違い無く、荒居知秋は別な誰か、否、何かに豹変する兆候を見せている。

「ふつ……、ふふふ、ふははは、あはははははあ！」

突然の高笑い。それは、荒居知秋といつ名の肉の器に悪魔が収まつた瞬間だった。

「あははははつ！ なあに、知秋ちゃん、捕まつちやつたの。ほんとトロいわねえ」

潰し魔は、逮捕されてしまった知秋ちゃんをまるで夏世ちゃんの

ような間延び調でゲラゲラと嘲り笑う。

「えつとお、岩国イ、皐月警部でしたよねえ。自供しますから、こ

こ座つてください」

明らかに食らわす気だ。わたしが席についた瞬間に、潰し魔からの拳が飛んで来るのだろう。監守室には、今だれがいるのだろうか。監守、早百合、それ以外に、誰か存在していくれれば心強いのだが。

動く。今動きをとらないと、出てきてもらつた意味がない。そして、喰らう。わざと攻撃をもらわないと、知秋ちゃんが豹変した証明にならない。今の高笑いが録音出来ていたなら良いが、監視カメラには音声を拾う機能が無いのだ。

一応この場には記録官がいて、隣室には、小富山もいる。証人は多いが、万全を期すなら、やはり喰らつておくのが一番確実だ。モロに喰らわず、だがかわしきらず。簡単なようでなかなか絶妙なタイミングが必要とされる妙技だ。

失敗は許されない。空手のメダリストを叩きのめした使い手を叩きのめした化け物だ。直撃は卒倒に直結してしまう。そしてそれは、顔の形を叩き崩されることを意味しているのだ。

細心の注意を払い、対決の席へと向かう。そして……、パイプ椅子に尻が触れた瞬間、それは飛んで来た。

シユツ！

風を切つて高速で迫る拳はすぐ側まで迫つてゐる。

『一本かなあ、三本かなあ……』

いつたい何本の歯が失われるのだろう。いよいよわたしも部分入れ歯か。そんなことを考えながら避けの体勢に入る。

身を引いて避けるわたしの顎を拳が捉える。

ガタガタン！

殴り倒されたわたしの顎は、割れてしまつてゐた。有事を察した小宮山や記録官が駆け付けてくる。

顎から込みあげる熱い激痛に情け無くも涙を流してのたうつわたしをこの場から回収してくれた。

続いて早百合、監守に、ウジ虫野郎と夏世ちゃんまで加えた監守室軍団が駆け付けてくる。

『早百合……、よりによつてウジ虫野郎まで呼んでくれたか……』

容疑者の許可無くポリグラフを持ち出し、しかも容疑者に殴り倒されて労災扱いだ。状況によつては懲戒免職さえも覚悟しなければならない。

回収されたわたしを素通りして早百合と宇治警視が取り調べ室へと突入、残つた四人が介抱してくれる。

「顎、真っ二つですねえ。でもよかつたあ。」こうこう折れ方は、綺麗に元に戻りますよお」

情け容赦無くへし折れた顎をいじり回す夏世ちやんが、顔の形が変わるべきは薄いと教えてくれる。

「「よかつたあ！」」

小富山も監守も、どちらも我が事のように夏世ちやんの報告を取り合った手を振り回して喜んでいる。

「あなたってほんとにファンが多いですね、羨ましい……」

それを見た記録官がしきりに羨んでいる。個人的には、そんなに羨ましいなら分けてやろうかと言いたくなる。こうこう追っかけ連中は、鬱陶しくて仕方が無いのだ。

取り調べ室前では、いつもと変わらない日常的なやりとりが、繰り広げられていた。

かく言うわたしは、あまりの痛みにもう視界が霞み、意識も朦朧としてしまっていた。そして、その意識が潰えてしまつまで、然程の時間は必要としなかつたのである。

わたしが意識を取り戻したとき、その脇には洋樹がいた。

「臯月さん、終わったよ……」

彼は、事件が決着したことを告げる。

彼の報告によると、捜査は洋樹とその部下に当たる高橋刑事に引き継がれ行われたらしい。つまり、単独行動で大怪我を賜つたわたしと、潰し魔誕生の取つ掛かりとなつてしまつたと目されている早百合は、わたしの意識が飛んだ時点で捜査から外されてしまつたことになる。どうやら早百合に対する除外の建前は、わたしに協力したことに対する連帯責任といつことになつていいようだ。

「……、……、……」

そこまで報告してくれたあと押し黙られてしまつた。我が夫ながら、どうしてこの独特のもどかしさが癪に障つて仕方がない。

「一緒になるときもあ、どんな事でも隠さずに打ち明けることって約束せんかったっけ！？」

わたしだつて事件を搔き回した者としての責任を感じているし、自分が携わつた事件の結末は気になつていてるのだ。

「立証出来た訳？ 知秋ちゃんの分裂症」

あれだけ証拠が揃つているのだ。出来ない筈は無いのだが。そんな筈は無いのだが、なぜだか嫌な予感が胸の奥に大きく蟠つっていた。決してゼロという訳ではないのだ。知秋がもう、この世には亡いという可能性は。その最悪な結末を迎えている可能性を完全に打ち消すためにも、早く洋樹の口から、一の句を継いでもらいたい、早く。

「あんたが捜査引き継いだんでしょう！？ 早く教えなさいよ！」

自然と言葉も荒くなつてくる。洋樹が黙るとき。それは、都合が悪いことを言いあぐねているときなのだ。ただし、自分にとつてではなく、相手にとつて。

.....

恐ろしく永い沈黙だ。どうやらこの事件が迎えた結末は、とにかくショックキングなものであるらしい。

わたしにとつて……。

「俺は、ずっと主張してたんだ。ずっと」

突然如き、たぶんの無い話、わたしを傷つけないよ、は
りと言葉を選んだ上で選択されたストーリーなのだろうか。残念な
がら、今の所は潰し魔事件との繋がりが何も見えて来ない。

団と和式にしろって主張してたの……。解つてたからなんだ。いや、こいつことが起こり得るって！ 解つてたからなんだよ！」

そうなると、必然的に一つの疑問が立ち上がる。【なぜ知秋ちゃんはそんなことをやつたのか】という、あまりにも妥当な疑問が。それは、最悪な結末へと導く道標なのだろうか。それとも、彼女が最期の最期に見せた正義と勇気と、意地の証なのだろうか。出来れば後者であつてほしい。あつてほしいと願つてはいるのだが、おそらく九割方前者であろうことも、残念ながら予測は付いていた。

「咲耶君……、生きてるの？」

これがこの事件における最悪の結末。【潰し魔出現の元凶が自分であることにショックを受けた早百合が自殺し、それに責任を感じた知秋ちゃんまで自殺】という、全くもつて救い様の無い可能性を、わたしはついに、声に出して問うてしまった。どうしても問わずには

はいられなかつたのだ。

白という色は、気持ちを落ち着けてくれる効果があつた筈だ。それなのに、純白寝に色彩が統一されている病室という空間に打ち捨てられているわたしは、どうしてもその色から薄ら寒さしか感じ取ることが出来ない。

「答えてくれる？ さ・ゆ・り・は！？」

最近病院でも取り入れられ始めたという、場違いな程にフカフカな低反発マットレスを尻に敷きながら、洋樹の目を瞬きもせず見詰める。早く答えが欲しい。早く早く。

雲一つ無い空から降り注ぐ六角型の可視光線ですら、わたしを蒸し殺すために放たれた熱線であるかのように思えてならない。どうかしている。自分でもはつきり判るほど、今のわたしには冷静な思考、判断力が欠落していた。

「加藤は……、死んだよ」

……、……、……。

予想はしていた。そうなつていることは、予測できていたのに、あまりのことに言葉を失つてしまつた。そして、今まで生きてきた中で一番といつていいほど、思考が混乱してしまう。

明らかに、わたしのせいなのだ。

あの時の一言。【あんたがそんなどから、知秋ちゃんが分裂しちゃつたんじゃないの？】

この言葉で早百合が【自分のせいなのだ】という可能性に行き着いたのは火を見るより明らかなのである。取り返しのつかない失態。後悔先に立たずとはよく云つたものだが、今回の後悔は、役にも立つてくれなそうだ。いくらここで後悔したところで、早百合や知秋

ちやんが還つてくる訳ではないのだから。

荒居知秋容疑者の起訴状を検察庁へと送付し、結局事件は【容疑者死亡による書類送検】という極めて曖昧な解決を迎えることになってしまった。

洋樹から聞いた経過報告によると、わたしが意識を飛ばしたあと、その時の映像を根拠に知秋ちゃんに対しても本格的なポリグラフ検査を実施。それにともなって潰し魔誕生の原因は仕事上のストレスであるということが確定したらしい。

ここまでではあの時わたしが実行した作戦の通りに事が運んでいる。何の問題も無い。

「なんでこの検査結果が早百合の知るところになっちゃった訳?」「早百合も自宅謹慎にでもなっていたに違ひ無いのだから、誰か教えない限り、知る術が無いような気がするのだが。

「人の口を完全に塞ぐには殺すしか無いんだぞ? 検査結果知つて連中、片つ端から殺して回れってのかよ」

どういう事なのだろうか。違法取り調べを行つた悪徳刑事に加担した刑事が、厳重注意だけで済んだとでもいうのだろうか。そんな事は絶対に有り得ない。有り得ない筈だ。その疑問を口に出して聞いてみる。

それに対する解答は、

「違法扱いになつてないんだよ、皐月さんのポリグラフ持ち出しじゃ持つてつただけで使つた訳じゃないからつて」

「あのウジ虫野郎、要らんところでわたしの人の権なんぞ尊重せんでもいいいつの……」

わたしに違法性が無いと判断されたがために、早百合が出勤してしまったのである。あの早百合の事だ、関係者から捜査の経過を聞いて回る事は想像に難くない。

よしんばそれで皆が黙つていたとしても、捜査資料の閲覧という手が有る。彼女が謹慎になつていなかつた以上、遅かれ早かれ知れることにはなつていただろう。

今、私たち夫婦は、早百合と知秋ちゃんの墓参りに来ている。二人の墓が同じ墓地に有つたのは意外だつたが、どうやらどちらも江戸っ子だつたらしい。わたしは早百合の、洋樹は知秋ちゃんの、それぞれの墓標を二手に分かれて掃除に入る。

「早百合……、ごめんね。本当に、ただ、ごめんなさい……」

気づいたときには、わたしは只々平謝りに謝つていた。

はじめは、取つ掛かりを作つたのはわたしだが、早百合が死んだのは早百合自身が弱かつたからだと思っていた。だが、自分が同じ立場に立つたらどうしていたか、それを考えてみた結果、おそらくわたしも死ぬだろうという結論に至つてしまつたのだ。

それほど自分が放つたあの一言が持つ意味は大きかつたのだとう事を知り、それに気付いた後からはもう、謝ることしか出来なくな

なってしまったのである。

「ごめんね早百合。わたし、絶対に逃げないから。ずっと、背負つてくからね、あんた達を……、……、……、殺しちゃったこと」わたしは逃げない。そのためには、まずは認めなければ。一人の死は殺人であり、その犯人はわたしなのだということを。「わたし、警察辞めることにしたから。勿論逃げるためじゃなくて、償うために」

身の振り方はもう決めてある。妹が開業し、今や全国展開するまでに至つた調査会社。警察と同じ捜査権、犯人逮捕権を与えられている【警視庁公式依頼調査機関】全日本ディテクティブカンパニーへの入社。

前々からスカウトを受けていたことも有り、すんなり入社できることだろう。わたし自身何度か世話になつたことも有り、面識という点でも問題はない。後は、宇治警視に辞表を提出するだけだ。

「ごめんね」

最後に墓標の前にひざまづき、深々と頭を下げてその場を辞す。

知秋ちゃんへのお参りを済ませた洋樹と入れ代わり、彼女の墓標の前でも同じことを繰り返す。こうしてわたしの、贖罪の一日は暮れていった。

空の色が、深い青から薄い青に変わつて、出勤したわたしは計画

を実行に移す。犯した罪を償つたために。

結

解決（後書き）

今回で完結で"J"もこもる。(^-^)。

今までタイムリーにお付き合い頂いた皆様、ありがとうございました（――）

何度もレッドゾーンに入ってしまいましたね。申し訳ないです。最後の最後でレッド三桁……、言い訳も出来ませんm(—_—)m

ではではまた次回作でお会い致しましょ、……、つておまえ、あと四本も連載残つてんじゃねーか（セルフ突つ込み）！
つてな訳で、暫く新作は出せません

何卒ご容赦くださいませ

ではでは、重ね重ねありがとうございます（^〇^）～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1933b/>

潰し魔

2010年10月14日22時53分発行